

彦根藩の医学事情の一端 彦根城博物館を訪問して

2007年1月7日、彦根城博物館を訪問し、同館学芸員・野田浩子氏から彦根藩の医学事情の一端について、ご教示を受けた。

彦根藩医としての河村家

河村家が彦根藩医であったことを示す史料として、「医者由緒帳」があるとのこと。この史料には、彦根藩医をつとめた医家の名前が記載されているという。河村純碩は1844(弘化元)年に二人扶持、翌1845(弘化2)年に苗字帯刀御免となり御医師並に取り立てられたということが記載されているとの説明を受けた。

また、藤井讓治編『彦根藩の藩政機構』(2003年彦根城博物館ほか刊)を紹介された。同書には、1856(安政3)年の「彦根藩役付帳」が活字化して掲載され、彦根藩医が列記されている(pp. 312-313)。河村純碩が奥医師、河村純達が表医師として記されていた。本書では、奥医師よりも上位に奉薬役と奉薬・奉針・奉膏加役という役職をもった医師がおり、この役職の医師が殿様に実際に薬・針・膏薬を施す役目であった。

河村家の所在地については、「藩士新古家並記」により、1857(安政4)年には元町の浄運寺の3軒東隣にあったという。当時の武家は位の異動によって、住居も頻繁に移転したそうである。また、1908(明治41)年の「彦根市街及商工業者一覧」では一番町に河村医院が記載されている。なお、彦根史談会編『城下町彦根-街道と町並』(2002年サンライズ出版刊)p. 100に「彦根市街及商工業者一覧」が部分掲載されている。

稽古館

河村家文書には、「稽古館古記」という文書がある。稽古館は彦根藩の藩校で、後に弘道館と名を変えている。稽古館は、彦根市立西中学校の辺りにあったという。現在、千代神社の向いにある金亀会館は、稽古館の講堂を移築したものである。

森下驥

河村文庫の古医書の中に、彦根藩・森下驥著『簸揚傷寒論』上・中・下巻(1821[文政4]年序)がある。森下驥なる人物は如何なる人物なのか、これについても、野田氏からご教示を受けた。彦根城博物館で所蔵されている「彦根歌人伝」という史料に、森下驥は挙がっていた。字は千里、通称は松亭、1836(天保7)年に73歳、市医であり11代藩主・井伊直中の側室・富(井伊直弼の実母)を治療している。また、国学院大学日本文化研究所編『和学者総覧』(1990年・汲古書院刊)には彦根藩医で1843(天保14)年12月18日に亡くなったと記されていた。

終わりに

ご多忙中、上述のように、彦根城博物館所蔵史料や参考図書を駆使してご教示いただいた野田浩子学芸員に厚く御礼申し上げます。

(取材：菅修一、赤澤久弥、寺升夕希、藤村三枝)